

改革派聖餐論の特色

——カルヴァンからウェストミンスター信仰基準へ——

坂井純人

はじめに：改革派の聖餐論の眼目＜問題意識＞

本稿の目的は、改革派教会の伝統的聖餐理解を明らかにすることである。しかし、一口に改革派聖餐論と言っても、そこには多様な伝統と類型が歴史的に織り合わされて存在する事実がある¹。改革派伝統の主要な代表者には、カルヴァンが挙げられるが、彼の聖餐理解にも発展と変遷、深まりがあることが、近

¹ P.ヤコブスは、多くの改革主義信条の配列の特色として、聖礼典の教理が教会秩序との密接な連関で述べられていることに注目し、両者の関係を、「教会秩序は信仰告白に属し、聖礼典からその場を受け取り、また聖礼典の執行は、教会秩序を必要とするということである。聖礼典の純粋な使用は教会秩序への問を包含する」と要約している。ここに、教会を教会たらしめる見えるしるしとしての御言葉の正しい宣教、聖礼典の正しい執行に加えて、教会秩序という信仰告白事項との関連が述べられる。ヤコブス、『改革主義信条の神学』（新教出版社、1981年）、161頁。

聖礼典は、御言葉と教会秩序との関係にあって、キリストのからだを建て上げる重要な意義を持つ。この視点から、特に聖餐におけるキリストとの交わり、現臨理解も改革派教会の特色ある教理となる。カトリックの実体変化説やルター派の共在説とも異なり、さらに、単なる記念説とも違う、聖霊によるキリストの現臨理解は、信仰者による実質、しるしが意味し、保証する聖餐の内容の受領へと導く。これは聖餐の主催者であり、与えられる恵みの内容の付与者であられるキリストとそこからである、信仰者たちとの結合という関係理解をも表明するものである。ここに、聖餐理解と教会形成との間の生命的関係が生み出される。

年の研究により知られている。例えば、ヴィム・ヤンセは、カルヴァンの聖餐論の発展について、1536年から1537年にかけては、「ツヴィングリ化」の傾向を示す特徴がみられ、1537年から1548年の間には、「ルター化」への傾向が見られる、と指摘している。さらに、ツヴィングリの後継者、ハインリヒ・ブリンガーとの交渉の結果を反映する「チューリヒ一致信条」や、1559年版の「キリスト教綱要」では、ルター派からの論敵となったヨアヒム・ヴェストファールとの論争の結果が反映され、逆に1560年から1562年には、再び、ルター派との和解を目指す方向性を示す、とされる²。同様の指摘は、セルダーホイスによってもなされているが³、マラーは、初期カルヴァンの聖餐理解については、単純化の方向を避けつつ、ツヴィングリ、メラニヒトン、ルターの真理契機に通底する多様性の萌芽を持ったカルヴァン像を描いている⁴。

このような研究成果から、カルヴァンの聖餐理解のモチーフは、神の主権と超越性を強調する視点や逆にキリストの肉と血に与るというキリストとの結合のリアリティを語る激しさを共に、含むと言い得るであろう。前者の視点からは、ツヴィングリのように、聖餐の品々における物素へのキリストの内在を否定し、キリストの死の記念と捉える、象徴的、記念説への契機が提示される。この場合、ローマ・カトリック的な実体変化説やルター派の所謂、「共在説」には否定的になる。しかし、逆に、「ルター化」への傾向と云う場合には、実際に、そこに臨在されるキリストのからだと血によって信仰者が養われる霊的現実を表現することになる。この場合にも、ルター派とは異なり、信者でない者が、聖餐の実質に与ることは否定されるが、強調点は、そこに臨在、内在されるキリストに信仰者が霊的に養われる恵みを提示する点にある。その意味では、単なる象徴説や記念説では説明できないキリストにある現実の信仰的養いが強調されることになる。無論、そこでも真実に、キリストのからだと血によって

² ヴィム・ヤンセ「カルヴァンの聖餐論」、『新たな一歩を』（キリスト新聞社、2009年）92頁

³ Herman J. Selderhuis ed., *The Calvin Handbook* (WM.B. Eerdmans Publishing Co., 2009) p. 345.

⁴ Richard A. Muller, "From Zurich or Wittenberg? An Examination of Calvin's Early Eucharistic Thought" *Calvin Theological Journal* 45 (2010) pp. 243-255.

信仰者が実質的に養われると云う場合の肉と血の理解は、キリストの肉体的場所的現臨と受領の形式を巡って、ルター派とは、異なる理解を持つことになる⁵。

カルヴァン自身は、実体変化説を批判するのみならず、単なる記念説、共在説にも批判的であった。しかし、同時に、各々の真理契機に敏感であったのは、聖餐論こそ、宗教改革プロテスタント陣営において、一致を目指すのに、もっとも解決困難な課題の一つであると見なしつつ、同時に、プロテスタント内部での一致を図る最重要課題の一つと考えたからであろう。カルヴァンは、ツヴィングリやルターの真理契機をさらに神学的に精緻な神学的表現で表そうとした。この意味で、プロテスタントのかなり広い範囲において、その聖餐理解が、通用する射程を持つと言えるであろう。ここにプロテスタント陣営において、カルヴァンの聖餐論を研究する意義もある、と言える。しかし、歴史的現実的には、宗教改革当時、教会的一致の課題実現は困難であった。歴史的検証を試みると、カルヴァン自身の理解に発展がある事実と相当程度にカルヴァンに独特な表現が見られる点とは、この複雑な事情を反映している、と推察する。

しかし、この独自性と改革派諸信条との共通理解と異同の確認を通して、改革派教会全体としての聖餐理解の特色を浮かび上がらせることは可能である。というのは、カルヴァン個人の思想にのみ思想的源流を独占的に遇らせるのではなく、改革派教会全体の諸信条の中に、その特質を見出すことが、信仰告白的教会としての改革派的姿勢の特色の一つでもあるからである。本稿では、改革派伝統の形成に特に影響力を持つカルヴァンと英米を中心に長老派教会に影響力を持つウェストミンスター信仰基準の聖餐理解を比較しつつ、その前後、

⁵ カルヴァンは、キリストの肉体と我々の肉体との人間本性における同一性を聖餐理解においても強調する。キリストのこの肉体の実質から命を注がれる結合において、我々は、永遠の命に養われるのである。これは、十字架の後に復活し、昇天、着座された栄光化されたキリストにおいても二つの本性（神性と人性）における完全な人性理解は貫徹されることになる。すなわち、場所的、肉体的現臨という存在の在り方をしないキリストによって養われる逆説を、カルヴァンは、真の肉体を持つ我々の敗いと見たのである。同じ人間本性を持つキリストが栄光化され、天上におられるからこそ、我々は、天上の生が保証され、さらに、今生の生においてもキリストとの結合を通して、聖霊がもたらして下さる永遠の命に信仰を通して養われるのである。赤木善光、『宗教改革の聖餐論』（教文館、2005年）、463-466頁を参照。

周辺の類型との関係を考察することに課題を限定する。その検証過程の中で、聖餐理解における改革派伝統の多様性と一致する部分が明らかにされるであろう。

まず、聖餐とは何か、と言う主題について、幾つもの重要な神学的課題があるが、本稿では、聖餐におけるキリストの臨在、現臨の理解に関心を集中する。何故なら、この問題こそが、カトリック、プロテスタント諸派を巡って、キリストとの結合という救済論上の最も重要な局面を礼典的表現で表す神学的特色となるからである。これは、カルヴァンが、キリスト者の生活において、キリストとの結合ないし、キリストとの交わりを最重要視した事実と相俟って、礼典理解の生命的課題の一つであった。

I : カルヴァンの聖餐理解の特色

①<キリストとの結合の重要性>

カルヴァンの信仰と神学にとり、生命的に重要であったのは、まず、キリストとの結合である。これは、救済論上だけでなく、彼の教会論の要となる。カルヴァンは「キリスト教綱要」第3巻において、次のように述べる。

もし、あなた自身を思い見るならば、断罪は確実である。けれども、キリストはその一切の恵みにあなたを与らせて、彼のもつ全てはあなたのものとなり、あなたはかれのえだとなり、こうして、あなたはかれと一つになる。それゆえに、かれの義はあなたの罪を圧倒し、かれの救いはあなたの断罪を滅ぼし、かれはその尊さをもって、あなたがふさわしくなくいまに神の御前にあらわれることがないように介入したものである⁶。

ここでは、キリストと一つにされることと救いの確かさが一体的に把握されている。

⁶ カルヴァン、『キリスト教綱要』（1559年版）3巻2章24節、（新教出版社、1963年、渡辺信夫訳）53頁

次に、教会論を語る「綱要」第4巻では、このことは、御霊の働きの内に、聖晩餐の出来事を次のように説明する。

すなわち、御霊が空間的にへだてられていることどもを、正真正銘、一つに結び合わせたもう、ということがそれぞれである。さて、キリストは、御自身のいのちを、あたかも、骨と髄とに入り込む、と言ってよいほどに、われわれに移し注ぎたもう、その肉と血との伝達を、聖晩餐において証しし、また証印したもうのである⁷。

これは、「御霊の効力」によって成就するキリストと彼の民の結合である。さらに、この恵みは、真の信仰と心の底からの感謝をもって受け入れる信仰者だけが、この益にあずかる、とされる⁸。ここにキリストとの結合という救済論上の生命的事柄が語られると共に、この結合を可能ならしめるのはひとえに神の御霊の働きであり、この生命的一体性を味わう重要な場が、聖晩餐なのである。この聖晩餐における恵みの受領者は信仰を通してキリストと結合された民である。故に、カルヴァンにとり、キリストとの結合を中心に展開する聖餐の教理は、救済論と教会論とを結ぶ急所ともなるべき重要課題であった。このようにして、キリストとの結合がもたらす霊的現実と恵みは、真の神の契約の民を生み出す。

このように重要な聖餐の教理であるが、カルヴァンによれば、礼典自体が、キリストとの結合を生み出すのではない。むしろ、キリストによって、すでに与えられている結合を御言葉と礼典が強化するのである。では、御言葉と礼典との関係はどうか。これは、御言葉が優先し、礼典のしるしと約束を保証する。さらに、御言葉によって礼典にふさわしく与る信仰も与えられる。この礼典において、第一に、キリストと我々が一つにされるため、第二に、キリストの全ての恵みにあずかるものとなるために、聖餐の奥義においてキリストは差し出されるのである⁹。そして、キリストとの結合はすでに信じる者には与えられて

⁷ カルヴァン、上掲書 4巻第17章10節、88頁

⁸ 上掲書、第4巻第17章5節、83頁

⁹ 上掲書、第4巻第17章11節、90頁

いても、更にこの恵みに招かれるのは、我々の弱さの故である。聖礼典は根本的に、御言葉と礼典なくしては、さまよひやすい弱い我々の信仰の養いのために与えられているのである¹⁰。

②<キリストの臨在の在り方>

キリストの恵みの受領の際に、問題になるのが、キリストの礼典における臨在の理解である。カルヴァンは、カトリックの実体変化説、すなわち、キリストの肉体の物理的現臨は激しく否定する。キリストの取られた肉体は、我々と同じ、完全な人性を持っており、それは復活、昇天、着座以後も栄光化された状態においても、天的性質を持ちつつ、地上に同時に存在することはしない。むしろ、神的位格と一つに結合されたキリストの人性は、聖霊において、信仰を通して、信仰者と共に現臨される。神性と分ち難いお一人のキリストの人性は、このようにして、天にありながらもキリストと我々との霊的結合を通して、礼典において、我々を霊的に養われるのである。これは、ルター及びルター一派の所謂、共在説とも異なり、礼典の物素とそれを通して受け取るキリストの実質とを区別した議論である。にもかかわらず、キリストのからだと血を表すしるしは、聖霊によって効力あるものとされ、具体的に信仰者自身を養うしるしと事柄は、ここに礼典的一致を見せる。しかし、聖霊により信仰を通して、注がれる礼典の実質とキリストの実質も区別されつつ、我々を養うのである¹¹。カルヴァンが、我々は主の晩餐においてキリストのからだと血を飲食するのである、と表現する時、そこでは常に、「霊的な仕方」であることが強調される。霊的な仕方、とは、信仰者も不信仰者も共に、キリストのからだに養血に与るという客観的な可能性を意味しない。ルター派では、信仰者は命に養われ、不信仰者は、この飲食によってさばきを招くが、客観的には、両者共に、そこにいますキリストのからだと血を飲食する事になる¹²。カルヴァンは、礼

¹⁰ カルヴァン、『キリスト教綱要』(1536年版)(教文館、2000年)151-153頁

¹¹ 上掲書、185頁、ここで、カルヴァンは明確に「サクラメントにおいて与えられるのは、彼のからだの実体自体ではなく、キリストの真の本性的体でもなく、キリストがその体をもって私たちに与えたもた全ての恩恵である」と述べている。

¹² 「和協信条」、根本宣言第7条、『ルーテル教会信条集』<一致信条書>、聖文舎、

典において用いられる物素を直接的にキリストのからだと血であると解さなければ、御言葉と礼典の事柄自体もキリストのからだの実質とは区別する。キリストのからだは天にあるのである。しかし、礼典におけるキリストのからだは血の飲食の意味が主張される限り、この意味が追求されなければならない。彼にとり、礼典の実質は、キリストである。しかし、ルターとの比較において、キリストの肉体の性質は、我々と同じ肉体であり、遍在はしない。栄光化されているが、しかし、天にも地上にも同時にあるからではない。聖霊によって、神性と人性を分かちたく持つ、キリストとの神秘的結合が主の晩餐において、信仰を持つ受領者との間で起こる。そして、我々、キリスト者は、天にあるキリストの実質から、真実に、信仰を通して注がれる恵みによって養われるのである¹³。

Ⅱ：改革派教会の聖餐理解におけるキリストの臨在の理解

A：<カルヴァンと同時代人の理解>

①ツヴィングリ(1584-1531)

次にカルヴァンの理解が同時代人の改革派神学者らとどのように関わっているかを考察してみる。まず、スイス宗教改革の先駆者であり、チューリヒの宗教改革指導者、フルドリヒ・ツヴィングリの理解に注目する。従来、ツヴィングリの所謂、象徴説とカルヴァンのキリストの現臨説が対比されるからである。両者は、復活、昇天、着座以後のキリストの肉体が、地上的には不在である点においては一致した。しかし、聖餐において起こる出来事についての理解は相違している。ツヴィングリの聖餐理解については、「キリスト教信仰の解明」(1531年)における『聖餐におけるキリストのからだの臨在について』を資料

1982年、859-862頁、

¹³ 『キリスト教綱要』(1559年版)第4巻第17章11節、89頁では、この実質は、第一に「意味」、第二に「主題ないし内容」、第三に上記二者から由来する「力」、「あるいは」「効力」と語られている。意味は約束であり、内容は十字架の死と復活を伴うキリスト、効力とは、贖い、義、聖、永遠の命、ならびに、キリストが我々に授けたもう他のあらゆる恵み、である。

とする¹⁴。そこでは、曰く「地上においてキリストの苦しみを担い、今や天にあって神の右に座するキリストのからだは、聖晩餐においては本性的、本質的にではなく、ただ霊的 (sacramentaliter) にだけ味わわれる」さらに、「キリストのからだを霊的に食すとは、精神を尽くし、心を尽くして、キリストによる神の慈愛と恵みに信頼を置くことと同じである」とされる。具体的には、悩みの中にあるキリストの贖いの意義を思い起こし、主に感謝しつつ、主の晩餐に与ることが求められているのである。この信仰をもって主の晩餐に与る時、又、同時に兄弟達とキリストのからだの「しるし」である二つの品々を分かち合う時に、「本当の意味でキリストを象徴的に味わっていることになる」のである。ここには、信仰者のキリストに対する記念、感謝、信頼といった要素が強調されることになる。

信仰者の魂はこれらの「しるし」によって証しされている恵みを覚え、信仰により、強められることになる。聖礼典が信仰を与えるという理解に対しては、聖霊のみが信仰を与えることと、聖霊によって与えられた神への信頼という信仰によって、主の晩餐の祝福は増し加えられる、とされる。礼典のしるしは、キリストの恵みを「意味する」、と解されるが、「である」とは言われない。このような記述から、ツヴィングリは「象徴説」に立つと言われるのである。確かに、キリストの贖罪の御業の想起、感謝、信頼に力点が置かれていることは事実である。しかし、その信仰は、聖霊なる神こそがお与えになる信仰であり、主の晩餐は、その信仰が養われる契機として大切にされている。彼の主張は、文脈、契機としては、カトリックとルター派に対し、キリストのからだの物体的、本質的、場所的臨在に対する反対をしており、彼の言う「キリストのからだを霊的に食する」ことは、この聖霊による信仰の養いとほぼ同じ出来事を指す、と理解できる。この点で、初期カルヴァンとの近接性を看取する解釈者がいることは理解できる。しかし、カルヴァンの理解は、キリストのからだの単なる場所的不在や記念に解消されない。むしろ、聖霊によるキリストとの現実的交わり、キリスト御自身による養いが強調される点、ツ

¹⁴ 『宗教改革著作集』14巻「信仰告白・信仰問答」(教文館、1994年)146-147頁

ヴィングリとのニュアンスの違いは、留意されねばならないであろう。したがって、ツヴィングリは、「キリストを食する」意義について、昇天と地上的不在を強調する観点から、キリストの肉体的現臨を強調するルターとは決定的に対立することになるのである。カルヴァンは、この点で、ルター派とは異なる仕方で、現実のキリストと信者との交わりのリアリティを主張したのであった。したがって、我々は、単に、「ルター派化」への傾向、とカルヴァンの主張を単純化する見方には、慎重である必要がある。

②ブリンガー (1504-1575)

次に、ツヴィングリの後継者、ハインリヒ・ブリンガーの聖晩餐理解に注目する。彼の起草した「第二スイス信仰告白」(1566年)において、かなり詳細な聖晩餐理解が明記されている¹⁵。第二スイス信仰告白において、ブリンガーは、外的、内的という言葉と区別を用いる。「外的には、パンが仕え人によって示され、御言葉が聞かれる。中略。しかし、一方、内的にはキリストの業が聖霊によって遂行され、彼らは、主の肉と血を受け、これに養われて、永遠の命に養われるのである。中略。聖霊は、我々のために死に渡されたもうた主の肉と血によってかちとられた罪の赦し、解放、永遠の生命をわれわれに結び付け、また与えたもうお方であり、こうして、イエス・キリストが我々のうちに生き、われわれがイエス・キリストの内に生き、彼がわれわれの霊的な食物、また飲み物、換言すれば我々の命となるように、真の信仰をもって受け入れさせたい。中略。このように主の体を食し、その血を飲むことは救いに不可欠であって、それなしには、救われることはできない」¹⁶。キリストの現臨理解においては、キリストの御体は天にあるとされ、「霊的に生かす御業として現臨される」とある。ここには、ツヴィングリと共通して、キリストのからだは、昇天しているが、聖霊により、聖餐の受領者の信仰を強め、養って下さることが主張されている。同時に、この聖晩餐に与ろうとする者に、悔い改めと信仰の自己吟味を求めている点などは、ツヴィングリに比較して、さらに、契約神学的な理

¹⁵ 上掲書、「第二スイス信仰告白」、446-451頁、

¹⁶ 上掲書、同上、449頁

解の発展があることが看取される。

B: <改革派諸信条の聖餐理解>

①四都市信仰告白 1530 年 (マルチン・ブーツァー起草)¹⁷

18 条: 聖餐について

キリストは、最後の晩餐においてと同様に今日においても、弟子の中に真に名を連ね、制定された通りに聖餐を受ける者たちに対し、自らの真の体と真の血を、真に食べ飲むために、魂と永遠の命のための食物、飲み物として与えて下さる。こうして、キリストは今も彼らの内に生き、留まり、彼らもキリストの内に生き、とどまる。彼らは最後の日にはキリストによって新しい不滅の命へと甦らされる。

ここには、素朴な表現で、キリストの肉と体に養われる聖餐におけるキリストとの結合のリアリティーが示されている。これは、ルター派のアウグスブルク信仰告白第 10 条 (1530 年) との近接性を示す点でもあるが、同時に、信仰者においてのみ受領されるキリストのからだと血である、とする点で、改革派の特色の一つが現れている。すなわち、明文化されていないが、ルター派でいうキリストのからだは血の「口での受領」の否定である。ここから、ブーツァーは、口と心とを区別しつつ、キリストの恵みを実際に受ける表現において、ツヴィングリとルターとの間を調停しようとしたとされる¹⁸。

②フランス信条 1559 年 (カルヴァン起草)¹⁹

33 章

わたしたちは信じる。神は、聖餐においてもバプテスマにおいても、それによって示されるものを実際に私たちに与え、また、実現したもう。従って、私たちは、そこで私たちに提供されているものを実際に所有し、また享受することができ。だから、容器のように純粋な信仰をもってイエス・キリストの神

¹⁷ 上掲書、「四都市信仰告白」、146 頁

¹⁸ ザイム・ヤンセ、上掲書、75 頁

¹⁹ 「フランス信条」、『信条集』前篇 (新教出版社、1955 年)、328 頁

聖な食卓に近づくものはすべて、しるしが表しているものを現実を受けとる。すなわち、イエス・キリストのからだは血とは、パンとぶどう酒とが、肉体の益になるように、魂のための食物や飲み物の役目を果たす。

34 章 一部抜粋

また聖餐においてパンとぶどう酒とが私たちに与えられるが、それらは真実に霊的食物として、私たちの役に立つものである。なぜなら、それらは、実際に目に見えるように、イエス・キリストの肉が私たちの肉であり、またその血が私たちの食物であることを示すからである。

33 章と 34 章の主要な内容からは、しるしと内容とを区別しつつも、キリストのからだは血によって、信仰者が真に養われる霊的現実が強調されている。きわめて、カルヴァンの表現が見事に実現している信条である。

③スコットランド信仰告白 (1560 年) (ジョン・ノックス他) 第 21 条²⁰

ここでは、まず、聖礼典の目的が語られる。

神の子たちに信仰をすすめ、聖礼典にあずかることによって、彼らの心に主の約束の確信を与え、選ばれた者が彼らの首なるキリスト・イエスと共に有する結合、一致、交わりの確信を心に銘記するよう、神によって定められたのである。

続いて、このようなキリストの身体と血とによって与えられる一致と結合とは、真の信仰により、聖霊の働きによってなされる。今は天にある栄光のキリストの御体と地上において死すべき我々との間の隔たりにもかかわらず、裂かれたパンがキリストの御体との交わりであり、飲む杯は、キリストの血との交わりであると確信する、との言明が見られる。このキリストとの一致は、キリ

²⁰ 「スコットランド信条」、上掲書、306-309 頁

スト御自身の御からだに聖餐の品々との本質的な区別は明確になされつつも次のような、強烈な表現で告白される。

われわれは、信仰深き者が主の晩餐を正しく行うことによって主イエスの御身体を食し、御血を飲み、それによって主は彼らの中にとどまり、彼らは、主の中にいることを告白し、確信する。正に肉は主の肉となり、骨は主の骨となる。そして永遠の神性が、彼自身は死ぬべき亡ぶべきものであるにもかかわらず、キリスト・イエスの肉に、生命と不死とを与えたもうたごとく、キリスト・イエスは、われらがその肉を食し、その血を飲むことにより、我らに同じ特権を与えたもうたのである。

天上のキリストと地上にあるキリスト者が、聖霊によって結び合わされ、聖餐において、豊かに養われることが、非常にカルヴァンに近い表現でなされている点が目を書く。これは、主要な起草者のジョン・ノックスが、ジュネーブのカルヴァンの下で直接、熱心に学んだ時期がある事実を想起するなら、このカルヴァンとの近さは理解できる。

④ベルギー信条 (1561 年、ギー・ド・ブレ起草)²¹

ベルギー信条は、聖礼典の教理に先立って、真の教会のしるしについて述べる (29 条)。ここでは、真の教会を認識するためのしるしは、教会が純粋なる福音の教えを説いているか、キリストの命じられたように純粋なる礼典を授けているか、教会の訓練が悪徳を是正するためにもちいられるか、どうかであると言っている。その後、33 章以下、35 章で、聖礼典の教理が語られる。関心が真のキリストの教会の形成に集中するため、すでにキリストと結ばれた者達にさらに養い、支えられるために聖礼典が定められたことが強調される。ここが「福音の言葉によってキリストの身体との交わりによって成し遂げられたもので、第二の誕生から与えられたものであって、この生命は神に選ばれたものにしき共通ではない」

²¹ 「ベルギー信条」、上掲書、354-355 頁

しかし、信じる者を養うために神は「天より降った生けるパン、すなわちイエス・キリストを彼らに送ったもうた」、「今も常にキリストは天の御父の右に座しておられるが、我らには、理解しがたい聖霊の働きにおいて信仰によって我らとの交わりをやめない。」

これは、「我らのあわれなる魂を彼の肉を食することによって養い、力づけ、慰め、彼の血を飲むことによって軽快になり、元気づけられる」ためである。
(同 35 条)

ベルギー信条も又、主の晩餐が、キリストとの結合がもたらす恵みを真の教会形成のための特別な神の配慮であることを示す、もともとカルヴァンの表現を体現した信条の一つであろう。

⑤ハイデルベルク信仰問答²² (1563 年、ウルジヌスとオレヴィアヌス起草)

問い 75 問から 82 問で丁寧な主の晩餐の教理を解説している。この問答書の代表的な聖餐理解を表すものとして、問い 76 と答えを引用する。

問い 76

十字架につけられたキリストのからだを食べ、その流された血を飲むとはどのようなことですか。

答え

それは、信仰の心をもってキリストのすべての苦難と死を受け入れ、それによって罪の赦しと永遠のいのちをいただく、ということ、それ以上にまた、キリストのうちにもわたしたちのうちにも住んでおられる聖霊を通して、その祝福された御体といよいよ一つにされて行く、ということです。

それは、この方が天におられ、わたしたちは地にいるにもかかわらず、わたしたちがこの方の肉の肉、骨の骨となり、ちょうどわたしたちのからの諸部

²² 「ハイデルベルク信仰問答」(新教出版社、1993 年) 吉田隆、山下正雄訳、52-61 頁

分が、一つの魂によってそうされているように、一つの御霊によって永遠に生かされ、また支配されるためなのです。

ここでは、聖霊によるキリストとの結合が主の晩餐におけるキリストのからだと血を表す品々の飲食を通して深められること、天にいますキリストは、聖霊において、地上の信仰者と一つにされ、その恵みの支配を強化される。これもカルヴァンに共通する理解である。

C: <カルヴァンの聖餐論と他の改革派神学者、諸信条との比較要点>

①キリストの身体的現臨は否定される（ツヴィングリ、ブリンガー、ハイデルベルク信仰問答、他と共通した見解）

②身体的にはないが、聖霊により、霊的に食することに関しては、ツヴィングリとも異なる。聖餐は、記念、象徴にすぎないものではなく、キリストは、主の晩餐を制定された方であるのみならず、その内容を与えられるお方でもある。この点では、ルターとも共通の理解がある。しかし、それは、霊的仕方であって、現実にはキリストの肉と血に与るのである、との表現は、天上のキリストの肉体との結合のリアリティーを聖霊論的に説くものである（フランス信条、スコットランド信仰告白、ベルギー信条、ハイデルベルク信仰問答とも基本的に一致）。

③聖餐で与えるキリストの実質の意味は、キリストとの交わりである。

ベルカウワーは、カルヴァンの聖餐理解に触れて、単にキリストがもたらされる益の受領に終わらず、キリストご自身との交わりが深められるのだ、との理解に注目している²³。キリストは彼の霊のみでなく、彼の御体をも約束しておられ、聖餐において、このキリストの全体と結び合わされることこそが、聖霊による昇天以後のキリストとの結合のリアリティーを示す理解なのである。聖餐において、キリストの肉と血の実質<栄光化された主の御体>の力に生か

²³ G.C. Berkower, *Studies in Dogmatics*, The Sacraments, (Eerdmans, 1969), p. 226.

される、という理解、はカルヴァンの聖餐についての神学のユニークな特質である。ここである実質とは、聖餐の品々とは区別される。しかし、「キリストの肉の実質から、霊の計り知れない力により、霊的生命が、我々の中に注がれる」。

また、「真実に」、「キリストは、御自身の肉と血の本体によって、真実に我々の魂を生かすために、外的なしるしによっても、御自身の御霊によっても、我々の下にくだりたまう」（綱要 4:17:24）、という表現がある。これは、パンとキリストの肉の実質との直接的結合を認めてはいないが、しかし、キリストとの結合における、キリストがもっておられる命を我々に注いで下さる恩恵を指す（綱要 4:17:9）。ここに、ツヴィングリともルターとも異なり、カルヴァン独自の強調点が見られると評価しても良いであろう。天にあるキリストの御体という意味ではツヴィングリと同様であるが、実際に、キリストのからだと血に養われるという表現はルターに近い。しかし、その場合ですらも、聖餐の品々とキリストのからだは区別され続ける。天から、聖霊によって注がれるキリストの命に養われる益こそが、聖餐における実質、と理解されるのである。チューリヒ一致信条では、スイス改革派内的一致を目指して、ツヴィングリの後継者、ブリンガーとの連帯の意識がにじみ出ているが、綱要 3 巻 17 章 32 節では、御霊によるキリストと我々との一体性が強調されており、天上における臨在、地上における不在というような二元論ではなく、キリストにあって天と血を繋ぐ生命的一致が強調されている。ここでは、信仰が用いられ、聖餐の主催者であられるキリストと信仰者の交わりが深められる。客観と主観の結び付きである。これは、ツヴィングリやブリンガー以上のカルヴァンの聖餐理解の聖霊論的發展であろう。

④聖餐による愛の絆は、キリストとキリストのからだ同様に、教会の間でも深められる。かしらなるキリストと体となる教会が、聖霊によるこの神秘的結合、命の交わりを通して強められる。そして、さらなる献身へと励まされるのである²⁴。聖餐にふさわしく与ることと信仰の吟味への関心は、カルヴァンと共に、ハイデルベルク信仰問答、スコットランド信仰告白が深い洞察を見せている。

²⁴ 『綱要』4 巻 17 章 38 節

⑤終末論的視野

カルヴァンにとって、キリストの昇天と場所的肉体的移行は、救済史的、終末論的意義からも極めて重要な意義を持つ。聖晩餐におけるキリストの肉体的現臨の否定は、救済論的、終末論的視野から見ると、真の贖いの完成であるキリストの再臨を待ち望む信仰と深く、関わるのである。主の晩餐において、キリストとその民は深く結ばれ、「全キリスト」にあずかるのであるが、しかし、「キリストにある全てのもの」を得るのではない。

両者は区別され、後者の完成は、終末の希望として、信仰の目標とされるのである²⁵。カルヴァンにとって、聖餐において、提示されるキリストの実質は、来べき不死性に与らせる「生命のパン」として、「唯一の慰め」となっていたのである²⁶。ここに、彼の救済論と聖餐論とを結ぶ終末論的洞察が光を放っている。この理解は、カルヴァンの救済史に対する鋭い時の感覚を示すものである。すなわち、聖餐は、キリストとすでに結び合わされつつも（すでに）、尚、完成を待ち望む（未だ）時の間にあって、いよいよ、一つにされる深まりの期待を増し加える、極めて重要な恵みの手段として位置づけられるのである。このような聖餐における終末論的な理解は、カルヴァンのジュネーブ信仰問答とハイデルベルク信仰問答、さらに、後のウェストミンスター大教理問答においても基本的に一致していると言える²⁷。

Ⅲ：＜16世紀宗教改革以後の変遷＞—ウェストミンスター信仰基準へ—

次に、カルヴァン以後に、17世紀半ばから今日に至るまで、世界の長老教会に大きな影響を及ぼしてきたウェストミンスター信仰基準を視野に入れて、カルヴァンとの異同を考察する。この比較は、カルヴァンの16世紀に果たした役割の独自性を浮き彫りにすると共に、久しく議論されて来ている16世紀の宗教改革者と17世紀のプロテスタント正統主義時代の神学との連続面と非連続面

²⁵ 赤木、上掲書、505頁、519-520頁

²⁶ 赤木、上掲書、422-423頁

²⁷ 牧田吉和、「現代における終末論＜改革派教会の立場から＞」『季刊 教会』（日本基督教団、改革長老協議会、2004年）、27-28頁

とを問う意識とも関わる。大陸と英米の改革派、長老派教会の立場という地理的な面のみならず、約1世紀を経た異なる時代を通じての共通性はどのように見られるのであろうか。あるいは、両者における個性の違いはどのように表現されているのか。このテーマの最近の研究論文は、北米のマチソン、スピア、ダンカン等によって提出されている²⁸。スピアとダンカンは、カルヴァンとウェストミンスター信仰基準との間に、本質的な違いはないが、むしろ、カルヴァンには独特な表現が見られることを認めている。例えば、キリストの現臨の理解は、聖霊による、とする点では、共通する。しかし、カルヴァンの方が、より直接的に、肉と血を食し、飲むと言う表現にこだわるのに対して、ウェストミンスター信仰告白29章7節では、信仰により、内的に、霊的にキリストのからだと血にあずかる、と表現する点などを比較すると、両者は内容においては一致するが、表現に違いが見られる点も事実であるとする。教派間の論争において、違いや区別を明らかにするため、あるいは可能な限り、一致の可能性を追求する途上の暫定的過程を生きた16世紀の改革者と自覚的に異同が明確にされた上で、教派的共通理解を示そうとした17世紀の時代（コード化の時代）とでは、表現の違いに差があるのは理解できる。この章では、ウェストミンスター信仰基準とカルヴァンとの比較を考証する。

①ウェストミンスター信仰基準²⁹

ウェストミンスター信仰基準の聖餐論の特色を語るものとして、信仰告白第29章1節、7節、小教理問答96問、大教理問答168問、170問を参照した。特に、要約的な内容を示すものとして大教理問168を引用する。

問い168 主の晩餐とは何ですか。

²⁸ Keith A. Mathison, *Given for you, Reclaiming Calvin's Doctrine of the Lord's Supper*, P&R Publishing, 2002; Wayne R. Spear, *The Nature of the Lord's Supper According to Calvin and the Westminster Assembly*; Calvin and Westminster on the Lord's Supper; Ligon Duncan, *True Communion with Christ in the Lord's Supper*; Calvin, Westminster and the Nature of Christ's Sacramental Presence, in *The Westminster Confession into the 21st Century*, Vol. 3, Ed., Ligon Duncan,

²⁹ 「ウェストミンスター信仰基準」（一麦出版社、2004年）松谷好明訳

答え 主の晩餐とは、そこにおいて、イエス・キリストの御指示に従ってパンとぶどう酒を与え、また、受けることによって彼の死が示され、ふさわしくそれにあずかる者たちが、[第一に] 霊的滋養と恵みにおける成長のために、キリストのからだと血によって養われ、[第二に]キリストとの結合と交わりを確かにされ、[第三に]神に対する彼らの感謝と約束関係、および、同じ神秘体の部分としての、彼ら相互の愛と互いに交流、を証しし、あらたにする、そのような新約の聖礼典です。

主の晩餐の意義は、キリストの死の記念、キリストと信者との聖霊による結合、霊的養いの現実化、主イエスと共に、キリストのからだなるお互いの交わりと絆、信者の信仰の吟味と成長を促す恵みの手段として、理解されている。特に大教理問答では、主の晩餐の陪席者への牧会的な配慮に満ちた表現が眼を引く。主の晩餐の意義、キリストの現臨の聖餐論的理解、真実かつ現実的なキリストによる信者との結合と信仰の養い、教会形成的な牧会的配慮の表現など、重要な点では、カルヴァン、ウェストミンスター信仰基準文書、いずれも改革派の特色として、深く一致している、と評価できよう。ゲリッシュは、カルヴァンとウェストミンスターの線の強調点の違いを指摘している。それは、ウェストミンスター信仰告白第29章7節が、「信者の信仰にとつて現実である」、との表現を取る時、これがツヴィングリの線、精神主義的であると解するの³⁰である。しかし、「キリストのからだと血は、信者の信仰にとつて、この礼典の中に、品々が信者の外的感覚に対してそうであるのと同じほど現実には、霊的に現臨している」との表現で教えている内容について、ロバート・リーサムは、ウェストミンスター信仰告白のこの部分とカルヴァンが教えたことはまったく同じことである、と明言している³¹。特に、恵みの内におこるキリストとの結合における契約的応答の強調は、カルヴァンとウェストミンスター信仰基準を繋ぐ一つの重要な絆であろう。

³⁰ Brian A. Gerrish, *The Lord's Supper in the Reformed Confessions*, Major Themes in the Reformed Tradition, Ed. Donald K. McKim, Eerdmans, 1992, p.252.

³¹ ロバート・リーサム、「主の晩餐」—現代アメリカにおける聖餐への問い—、(一) 麦出版社、2007年、原田浩司訳 81頁

ところで、近年のマチソンの研究では、実際の歴史の変遷と実践では、カルヴァンからウェストミンスターへと至る改革派に共通する大きな特色よりもむしろ、ツヴィングリの象徴的、記念的理解が実践的に影響力をもっているのではないかと指摘がなされている。マチソンによれば、これは、ウェストミンスター以後に活躍した著名な神学者達のカルヴァン解釈の誤解、それに基づく反動によるものと考証されている。特に、英米の長老派教会の歴史を見ると、ツヴィングリの記念、象徴説的な理解に傾く神学者が影響力ある者の中にも少なからずいることが指摘されている。そこには、スイスのトウレチン、スコットランドのカニンガム、米国、北長老教会のホッジ、南長老教会のダブネイらの名が挙げられる³²。カルヴァンとウェストミンスター信仰基準の間には、共通点が明確に見られるにもかかわらず、両者の影響を色濃く受けているはずの実際の英米の教会に、ツヴィングリの理解が比較的多く見られるとのマチソンの指摘は興味深い、歴史的検証を要する分野である。

②ウェストミンスター以後の改革派教会の聖餐論

カルヴァンとウェストミンスター信仰基準の近接性にもかかわらず、後に、ツヴィングリの象徴的理解に少なからず、改革派教会が傾いたのではないかとマチソンの指摘を再検証する。マチソンは、カルヴァンの聖餐理解からツヴィングリの象徴主義的理解への変遷に影響を与えた主要な人物として、トウレチン、ブラッケル、トウレチンの影響を強く受けたホッジ、ダブネイらを挙げている。ウェストミンスター信仰基準の伝統を色濃く持つ英米の長老教会には、とりわけ、19世紀の(オールド)プリンストン神学校の組織神学者ホッジの影響力が大きいことは事実である。特に、この課題を扱うに当たり、マチソンは、カルヴァンの聖餐論こそをカルヴァンの神学の中心に据えて評価したネヴィンを評価し、ネヴィンのカルヴァン理解こそが、改革派本来の聖餐の教理であろうと言う³³。マチソンは、北長老教会の代表的人物としてのホッジに加え、南長老教会の代表的神学者で、やはり、カルヴァンとは異なる見解

³² Mathison, *Ibid.*, pp.112-122, 129-134, 156-157.

³³ Mathison, *Ibid.*, pp.154-155.

を持ち、ツヴィングリの傾向を有する人物として、ダブネイを挙げている。さらに、大陸に眼を向けると、17世紀以降の正統主義時代のオランダ改革派教会で、極めて広く読まれた神学者、ブラッケルの影響もまた、「心におけるキリストの受領」という理解者として、ツヴィングリの傾向と捉えている³⁴。

現代の北米の長老派神学者、リーゴン・ダンカンは、カルヴァンからウェストミンスターに至る改革派伝統を聖霊による信仰を通しての真実のキリストとの交わりである、との結語で要約している³⁵。これは、スピアの結論とほぼ、同様であるが、スピアは、さらに詳細に、聖餐において提示されたキリストの恵みによって信仰が養われるという見方と、カルヴァンが、しばしば強調するキリストの肉体の実質に養われるとの見解を併記し、区別している。カルヴァンには、後者の傾きを見て、ウェストミンスター神学者会議で影響力をもった主要な神学者には、両方の立場が存在したと指摘しつつ、自らは、前者の立場をより聖書的な聖餐理解と判断しているが³⁶、これは、カルヴァンの礼典における「実質」理解をどう評価するかにかかっている。スピアの丁寧な歴史的考証に深く敬意を表すると共に、カルヴァン解釈においては、さらなる議論の余地があると筆者は判断している。今後の研究課題としたい。スピア、ダンカンや我々の研究成果を踏まえても、主の晩餐において、キリストの体と血に与るとの表現は、カルヴァンにもウェストミンスター信仰告白(29章)にも共通し

ている。そして、その臨在の仕方は、聖霊による信仰を通しての「霊的仕方」である、との理解も共通している。さらに、キリストの肉体の実質に養われるとのカルヴァンの理解の意味は、真のキリストの恵みの効力によって、信仰者が養われることであった。カルヴァンにとっての「霊的」表現とは、肉體性を深く包み込む全人格的なものであった。カルヴァンの場合には、キリストが聖霊により、信仰者と結ばれる(降下的)現臨強調と、他方、信仰により、信仰者、キリストの恵みの受領者の魂が天に引き上げられると表現される(上昇的)表現の強調とが共にある。前者のみが強調されたのではない。その意味で、ウェストミンスター信仰基準の場合は、キリストと信者との結合と交わりという契約的な交流を示す表現により、カルヴァンを継承しつつ、総合的な理解を大成化したと言えよう。すなわち、聖餐の中心は、神の恵みによって、キリストとの結合の内起こる信仰者の信仰を養う為の御業である。しかし、そこで提供される聖餐の「実質」理解は、単なる客観的客体としても、主観における人間の行為としても単純化されず、キリストが我々に授けたもうあらゆる恵みを伴ない、信仰者の主体を強める恵みの手段として、感謝の内に受領されるのである。

IV: 結論

我々は、以上、カルヴァンとウェストミンスター信仰基準が照らし出した改革派聖餐論の基本的特質と共通点を確認した。しかし、同時に、その歴史的流れの評価については多様な批評的見解が存在することも事実である。特に、カルヴァンとウェストミンスター信仰基準の本質的接近性の確認にもかかわらず、近現代の実践においては、ツヴィングリの象徴説、記念説への傾斜が見られるとのマチソンの指摘は、刺激的であった。何故なら、カルヴァンとウェストミンスター信仰基準に近接性が見られるということと適用としての実践とは、別の問題であるからである。今後も、正確にカルヴァンとウェストミンスターの線が、理解されているかと言う点と実践における適用とが検討課題であろう。真の改革派の聖餐理解と実践の再確認は今後も必要とされるであろう。同時に、他のプロテスタント陣営においても、同様の検証は共通して、必要ではないだ

³⁴ Mathison, *Ibid.*, p.122 筆者は、この項目の関連で、フランシス・トウレチン、ウイリアム・ア・ブラッケル、チャールズ・ホッジ、ロバート・L・ダブネイ、ルイス・ベルコフ、ヘルマン・バーフィング、ヘンデレン、フェレマーらの現代の欧米の改革派神学者の聖餐理解についても検討した。この部分は、初稿において、準備、掲載したが、紙面の都合で割愛することになった。紹介の機会是他日を期したい。ただし、いずれの改革派神学者も信仰を通して、キリストとの契約的交わりと応答を重視した点と聖霊による信仰を通してのキリストとの結合を聖餐の恵みを受領する上での生命的事柄と見なした点では、これらの改革派神学者達に基本的な一致が見られる事とを指摘しておきたい。

³⁵ Duncan, *True Communion with Christ in the Lord's Supper*; Calvin, *Westminster and the Nature of Christ's Sacramental Presence*, p.445.

³⁶ Wayne R. Spear, *The Nature of the Lord's Supper According to Calvin and the Westminster Assembly*, pp.412-413.

ろうか。何故なら、カルヴァンやウェストミンスター信仰基準が代表している聖餐における中心的理解は、単なる象徴の確認や記念にとどまるものではなく、霊的に、現実キリストと結合する祝福の増加であったからである。教派を問わず、この真理の明確な自覚なくして、主の晩餐の益を語ることは困難であろう。この小論を通して、プロテスタント諸教会が自らの聖餐理解の伝統を見直し、聖書的な土台に基づき、かつ、神学的確信をもって、キリストのからだなる教会形成に心血を注いだカルヴァンらの先達との対話が深まり、そこから、教会的コンセンサスにおける何らかの益が得られるならば、望外の幸いである。宗教改革の伝統と深く関わる日本のプロテスタント諸教会と改革者達との対話は、この意味で、未だ、積極的な意義を持ち続けているであろう。この意味で、カルヴァンからウェストミンスター信仰基準に至る改革派の伝統的聖餐理解とその評価と再検証の試みは、＜キリストとの結合＞という聖餐の恵みの中心を核心的に見つめる上で、大切な意義を他のプロテスタント諸教会の聖餐理解との対話においても持っているのではないだろうか。

(北米改革長老教会日本中会東須磨教会牧師、神戸神学館教師、神戸改革派神学校講師)